

効果的な介護福祉士教育の実践報告

－学生の特性に合った方法－

沼野みえ子・荒木 重嗣

On Practice for Effective Careworker Training: Focusing on Students in Class

Mieko Numano, Shigetsugu Araki

1. はじめに

平成17年4月本学人間総合学科に介護福祉コースが新設されて初年度が終わろうとしている。介護福祉士養成教育のなかではとりわけ実習教育が重要であり、そのためにカリキュラムと実習教育の系統立てた学習の準備、指導力が問われている。この報告ではまず本コースのカリキュラムと実習教育の特徴について考察し、その特徴に合わせた教育方法について考察する。また、本コースは20名2クラスという構成をとっており、少人数での授業・演習により、ひとり一人の学生の状態や学習理解の程度や戸惑いが手にとるようにみえることが実感できた。本コースのカリキュラムの特徴を踏まえた上で、学生の学習過程の状態に焦点を当てた介護技術演習の授業作りと、介護実習における巡回指導にカウンセリング技法を用いて個別的な指導を試みたことについて報告する。

2. 本校介護福祉コースカリキュラムとその特徴

2.1. カリキュラム全体

本コースの特徴は卒業と介護福祉士資格取得に必要な最低単位のうち、約66%を1年次に行い、2年次には残りの34%をこなすことになる。つまり1年次のカリキュラムの比重が大きい構成になっている。表1に卒業並びに介護福祉資格取得に必要な最低単位数を示す。

表1：本コースの卒業並びに介護福祉資格取得に必要な最低単位数

科目名	時間数	1年次単位数	2年次単位数	合計単位数
基礎ゼミ	30	1		
特別研究	60		2	
ベーシックフィールド科目より 教養演習等	30	1		
社会生活とマナー	30	1		
心理学	30	2		
人間学	30	2		

科 目 名	時間数	1年次単位数	2年次単位数	合計単位数
法学(くらしの法律)	30		2	
社会福祉概論	60	4		
老人福祉論	60	4		
障害者福祉論	30		2	
リハビリテーション論	30		2	
社会福祉援助技術	30	2		
社会福祉援助技術演習	30		1	
レクリエーション活動援助法	60	2		
老人の心理	30		2	
障害者の心理	30		2	
家政学概論	60	4		
家政学実習	90	2		
医学一般	60	4		
公衆衛生学	30		2	
精神保健	30		2	
介護概論	60	4		
介護技術I	90	3		
介護技術II	60	2		
形態別介護技術I	90	3		
形態別介護技術II	60		2	
介護実習(1年次2年次あわせて10単位)	450	5.83	4.17	
介護実習指導	90	2	1	
合 計		48.83	24.17	73

2.2 . 実習段階と実習開始時期の特徴

介護実習カリキュラムは厚生省令「社会福祉士養成施設等における授業科目の目標及び内容並びに介護福祉士養成施設等における授業科目の目標及び内容について」(昭和六三年二月一一日)(社庶第二六号)(各都道府県知事あて厚生省社会局長通知)に規定されており、介護実習は1段階・2段階・3段階と段階を経て実施することがも定められている。

これに基づき各養成校は養成期間(1年課程～4年課程)や実習施設等の関係などにより、実習の段階時期を決めている。その結果、実習段階の教育課程のガイドラインは規定されておりながら、その開始時期がバラバラであるという状況が生まれている。たとえば、第1段階の実習をみると、5月～6月、次いで7月～9月、もしくは前期授業の修了した10月、冬休み前の12月、1年次後期授業修了時期2月～3月と多岐におよんでいる。

では、本コースでの実習段階毎の開始時期を下記に示す。

第1段階実習 1学年

前期実習：6月上旬：通所介護実習/施設介護実習 5日間
後期実習：8月中旬：高齢者施設介護/身体障害者療護施設実習 10日間

第2段階実習 1学年

前期実習：12月上旬：高齢者施設/身体障害者療護施設介護実習 10日間
後期実習：3月上旬：高齢者施設/身体障害者療護施設介護実習 10日間

第3段階実習 2学年

9月中旬：高齢者施設 / 身体障害者療護施設介護実習

20日間

訪問介護実習 2学年

6月上旬：老人居宅介護事業所

5日間

その特徴をあげると次の2点があげられる。

- ・1学年次に2段階実習まで実施すること。
- ・1学年次に行う第1段階実習および第2段階実習は、前期実習・後期実習にわけて5日または10日間で構成されていること。

3. 本コースカリキュラムの課題

1年次のカリキュラムと実習との統合

先に述べた1年次のカリキュラムの重さと1年次の実習の重さが本コースの特徴といえるが、逆に2年次のカリキュラムの空きを作ることができることを可能としている。つまり1年次カリキュラムと実習教育の効果的な統合化、合わせて1年次実習の教育効果の向上が求められているといえよう。それを踏まえた上で、2年次でのカリキュラムに独自の工夫が必要となるであろう。

1年次でのカリキュラムにおいては、本年度は特に介護技術科目と介護実習での連携をめざして工夫を重ねてきた。まだ途中経過ではあるが沼野が日本介護福祉士養成施設協会 平成17年度全国教職員研修会（平成17年10月27日（木）札幌）において報告を行ったので、その内容を以下に記述する。

3.1. 介護実習とカリキュラムの統合の試みー介護技術科目との関連で

当校の介護福祉士コースは、今年度35人の新生を迎えてスタートした。4月から学生に介護技術の授業を教えている中で学生の様ざまな戸惑いや成長する姿を目にした。そのような学生たちに沿った授業の工夫を行い、介護実習における実習体験のなかにどのように影響しているのかを、アンケート調査、実習報告会での発表、実習終了レポート等で評価を試みてみたのでそれを報告する。

3.1.1. 介護技術科目における学生の姿

介護は身体と身体を密着させることによって支え合うという距離の近さが特徴であるが、演習をしていると、他者の身体に触れることに戸惑いがあったり腰が引けるため、相手との距離が大きくなり不安定な姿勢で介助をする姿が目立った。

一つひとつの技術の形はできても、介護の対象者である一つの障害を持った人と想定すると、どのような技術を使えばよいのかわからなくなってしまい何もできなくなってしまうという姿も見られた。

手足・聴覚に軽度の障害を持っている学生がいる。一人での実技では自信のなさからぎこちない動きになってしまっていたが、ペアを組んでの演習では、組んだ相手が非常にうまくその学生をカバーしてスムーズな動きをしていた。

3.1.2. 授業の工夫および目的

身体接触もコミュニケーションの一つと考え、触れることで相手を知るという目的で授業の始めに5～10分間ぐらいのウォーミングアップ（相手を背中に乗せる、両手をつないで脇を伸ばす、頭のマッサージ、肩もみ、2人組での柔軟体操、等々）を行うことにした。ウォーミングアップというかたちをとることで変に意識することなく自然に他者の身体に触れるということを重ねた。

1つのテーマに3コマを充てることにして、最終コマでは2～3人ずつのチームごとにケアを展開してもらうことにした。学生たちは自ら利用者の心身の状況を想定し、麻痺の程度（右麻痺だから言葉もしゃべれなくて、車いすの移動で...）や自立度など多方面から確認しプランを立てケアにあたる。できるだけ相手の状況を明確に知ろうとする姿勢が見られた。

と似たような方法だが、ここでは他者を意識して、一人ひとりの特性や個性の違いを感じ取り、それを活かして支えあう体験してもらうことを目的とした（言葉がはっきりしゃべれないからあなたは背中を支えていて。あなたは背が大きいから立位の姿勢を支えて...）。そのような支えあい（相互作用）が、介護の場面で利用者との間にもあることに気づいてもらう。

介護はまず相手をよく知るところから始まる。知るためにはコミュニケーションが欠かせないが、言語によるものだけがコミュニケーションではなく、あらゆる手段（上記の例では、身体接触や 介護の相手を統括的に理解すること）を用いて相手を知り関わりようとする姿勢が大切であり、それらを介護技術体験の中から感じ取ってもらうことを目指した。

また介護は介護者側から利用者への一方的な働きかけだけではなく、介護者間のチームによる相互作用や介護者と利用者間の相互作用によってさまざまに展開していく。授業の中でチームによる介護を体験することによってこれら相互作用に気づいていくことを介護技術演習の2つ目の目標とした。

3.1.3. 教育の効果について（実習での効果を見る）

はたして、それらの工夫が実際の介護の場面でどの程度効を奏したのか確認するために（チームによる相互作用を実習場面でどの程度意識することができたかを知るために）、1段階後期の実習のあとにアンケート調査を実施した。

1) 方法

アンケートの設問は「相手の動きによって自分の役割を考えて動くという実践の場面を想定して、介護技術の授業ではグループでの演習を取り入れてきました」（A）それが実習現場で役立った経験はありましたか？（B）どのような場面で、そこからどのようなことに気づきましたか？（C）職員がそのような動きをしている場面はありましたか？（D）学校での授業は役に立ちましたか？あるいは、授業でさらに深めてほしいことはどんなことですか？ というものであった。

2) 結果と考察

授業のねらいの達成度（アンケートの結果）

アンケートは記名式で、35人に配布して全員から回収し、回収率は100%であった。授業が役に立ったという回答が31人で、無記入が4人であった。結果として約9割の学生が介護技術の授業が役に立ったと回答している。しかしアンケート調査が記名式であったこと、アンケートの設問に「相手の動きによって自分の役割を考えて動くという実践の場面を想定して、授業ではグループでの演習を取り入れてきました」という説明を入れたためバイアスがかけられている可能性も考えられる。したがってこのままの数値を授業の効果として評価することはできないが、学生がどのようなこと

を体験・経験して何に気づいたかは読み取ることができるので、次にその具体的な記載例を紹介し、学生達の回答の意図を読み取りたい。

具体的な記載例

(A) 学生が体験したこと

ベッドから車いすへの移乗のとき、職員が利用者に声かけをしている間に自分は車いすの準備をした。

排泄介助のとき、職員が支えている間に自分が陰部清拭、オムツ交換、ズボンの着脱を行った。ストレッチャーに乗った利用者の背中を洗うとき、職員が横にして支え、自分が背中を洗った。車いすから入浴用のいすに移動してもらったとき、職員が利用者の上半身を支えたので自分は膝を持ち移動を手伝った。その後再び職員が上半身を持ち上げたので自分はオムツをはずした。

(B) そこから何を学んだか

一緒に介助している相手の先の動きを予測して動かなければならないと思った。

役割などは決まっているわけではないので、自分が今何をしなければならぬかを判断して行動しなければならぬと思った。

介助をする前に「これしていいのかな?」「今していいのかな?」と、自分のことを中心に考えてしまっていたが、利用者の方に目を向けて行動しなければならぬと思った。

入浴介助は短時間で終わらなくてはならないので、細かく説明を聞いている暇がない。一度言われたらすぐ動けるよう、何が必要なかを考えて行動することが大切と思った。

(C) 施設の職員が行っていたことを見て学んだこと

全介助の利用者を車いすへ移乗するとき、足側介助で靴を脱がせ終わった人が頭側を介助する人のために拘縮した上肢を広げていた。(介護はすべてチームプレイということを学んだ。)

一人で立位をとることができない利用者のズボンを脱がせるとき、一人が支えてもう一人が脱がせた。(2人で行ったほうが利用者負担をかけず安全だと思った。)

2人でおむつ交換をしているとき、一人が陰部洗浄をしている間もう一人がつねに話しかけていた。(利用者の精神的な負担感を軽減させるのに有効だと思った。)

ほとんどの介護を2人で行っていた。(息が合わなくては事故を起こしかねない。一人ひとりが仕事への自覚を持ち役割を認識していかなければならぬと思った。)

入浴介助のとき職員の一人が身体を支え、もう一方の職員が身体を拭いていた。

(自分は見ていただけだったが、職員が利用者を立ち上がらせたときに車いすをすばやく持ってくればよかった。息を合わせて介護をしないと利用者を待たせてしまうと思った。)

入浴で服を着脱させるとき、支える人と着脱する人が自然にできていた。

(役割分担ではなく自然に行われていたので、職員同士のつながりができていることが大切だと思った。)

特浴で利用者をストレッチャーに移乗させるとき、支える人、オムツをはずす人と分かれていて、手の空いた職員が支えるのを手伝ったりしていた。

(自分がすべき仕事が終わったらすぐ周りの状況を見て言われなくてもすぐ手を貸していた。周りを見るのが大切だと思った。)

入浴直前にストレッチャーの上で排便をした利用者がいた。そのときすぐ清拭用のタオルを持ってくる人、入浴の順番変更を告げる人など素早く行動していた。

(自分ですることを決めて積極的に動くことと、何か起きたとき自分は何をすればよいのか判断することの大切さがわかった。)

ベッドから車いすへの移乗のとき、職員に上半身を支えてもらい自分は足を持って移乗させた。

(職員から手伝ってと言われる前に、相手の動きを見てすぐ次にすることを考えなければいけないと思った。)

(D) 授業で役に立ったこと・深めてほしいこと

相手の動きを見ながら動く練習が役に立った。

3人のグループになって入浴介助の練習をしていたとき、誰もが手を出すように教えられたので役に立った。

グループで演習をする機会を増やしてほしい。今何をするべきなのか見つけられなかったのでまわりの動きを見る訓練をしたい。

グループで入浴介助をしたが、動きなどあまり把握できなかったのもう少しグループでする機会を設けてほしい。

チームで動くというのは大切なことなので演習で少しずつ増やして行ってほしい。

以上がアンケート調査からの報告である。なお無記入だった4名について実習内容・実習での様子などに関連させて考察したところ、

- ・自分に対して厳しく、自分はできなかったと評価した者が2名
- ・途中から実習の意欲を無くしてしまった者1名
- ・チームでの動きが苦手で、周囲の人との関係より利用者との1対1の関係に興味があった者1名などである。

これらのことから、学生の個々の特性や実習内容等に合わせた実習指導や教育アプローチのしかたも工夫していかなければならないところであることに気づかされた。

その後実習終了後のまとめの段階で、実習配属先ごとのグループでテーマを決めてレポートを作成し発表会を行った。その発表のなかからアンケート調査内容と関連する事項について以下に紹介する。

(E) 実習まとめのレポートから

- ・利用者の可動域やどうすると痛いのかなどがわかって、初めて入浴介助や着替えができるのだと思った。
- ・麻痺のある利用者がどのようなことが自分でできてどの辺を手伝ったらよいのかなどをよく知った上で、自分で座ってもらうという介護を経験した。
- ・利用者の皮膚の状態や拘縮の程度によって介助の方法が3～4通りあることがわかった。
- ・皮膚が弱い人の車いす移乗の方法を学んだ。(2箇所から同じ報告あり)
- ・むくみがある利用者に靴下をはかせるとき、前と同じゴム跡にゴムがあたらないようにはかせるということを学んだ。

アンケート調査や実習報告、実習終了レポートや実習記録等を見ると、学生自身さえも気づいていないがたくさんの体験をしている様子が伺えた。例えば上記の「実習のまとめレポートから」に記載された事柄（例えば皮膚の弱い方の車イス移乗の方法など）は、授業では触れていない部分であるし教科書にも載っていないにもかかわらず、学生たちは何気なく見ていて印象に留めている。

また、「利用者から『ありがとね』と言われてとても嬉しくなった。」という記載が実に多い。何もできなくて立ち尽くしているだけなのにありがとうと言われる。何か努力をして達成できたときに報酬的にほめられるという体験はしていても、たいしたこともしていないのにただそこにいるだけで感謝されるという体験は、学生たちにとって初めてなのではないだろうか。相手からの感謝の言葉が鏡になり、受容される自分の存在に気づくということが利用者との相互作用を生み出しているものと考えた。

入学当初の戸惑いを乗り越え、学生たちはどんどん食思を伸ばして成長している姿が伺える。私たち教員はその成長段階に合わせた学習の方法を工夫し示していかなければならないと感じる。

次章では、本コースの介護実習期間等の特徴にあわせた巡回指導方法の工夫について論じたい。

3.2. 介護実習の教育効果向上の試み

本校の介護実習における特徴は先に述べたように

- ・ 1学年次に2段階実習まで実施すること。
- ・ 1学年次におこなう第1段階実習、第2段階実習は前期実習・後期実習にわけて5日または10日間で構成されていること。

である。

このなかでも実習期間が10日間という集中し限定した期間での実習を行うことが特徴であるといえよう。入学当初の学生にとっては、初めて見る施設で、見知らぬ世代の方々と相手に、介護を肌で体験するのであるから、実は相当のストレスを抱えて実習を行っているといえる。

一般的には介護実習における教員の実習巡回指導は通常週2回実施するように指導されている。特に1年次のような実習体験の少ない段階での実習は不安が多く、指導する教員との面談、実習指導者からの直接的な指導・支援、実習生同士での支え合いが重要な鍵となる。¹¹⁾

具体的にはどのような実習を行っているのであろう。まず指導する教員の立場から沼野のレポートを示す。(1年次12月、2段階前期実習での巡回指導記録より)

3.2.1. 実習場における学生の姿

【事例1】学生のIさんは、実習施設の事情で直前になって受け入れが困難という連絡を受けたため他施設の通所介護サービス(デイサービス)での実習を余儀なくされた。この件以前にも実習施設が変更になるなど本人にとって不本意な状況が重なり、集中力を高めることができない状態で実習に入った。通所介護サービスの利用者は日常生活動作がほとんど自立されているために学校で勉強した介護技術を実践できる場面も少なく、毎日対話を中心とした同じような介護の繰り返しの中でやる気を無くしていた。学生の目から見ると、施設の職員には改善していこうとする姿勢が見えず、また“働き手”として使われているようで、この施設で実習を行うことに対する不満と不安を感じているようであった。巡回中に学生から上記のような訴えを聞き、今回の実習の目的をどこに置く

かを話し合った。その結果、介護技術面の習得ということから離れて、職員が利用者に話しかけるときのどのような意図を持って行っているのか、そのときどのような言葉遣いをしているか等に焦点を当てる。利用者はどのような気持ちでデイサービスに来ているか、家族はどのような思いをもっているのか、その調整役の立場である職員は利用者と家族にそれぞれどのような配慮をしているか等についてよく観察する。などに目を向けるようにし、どのような実習でも学びになることになると確認し合った。

【事例2】「学校で習ったことと違い不思議に思うことが多々あり質問したら、『悪いところばかり見えていいところ見ていない、いいところも悪いところも全部受け入れないと成長できない』と言われた。どう質問したらよいかわからなくなってしまった。」と学生から話があった。また、実習指導者からは「すべてを批判的に見ているような感じがするので、学生には『批判的に見ていたのでは何も残らないから、まずすべてを受け入れてから。』と言っている。」との報告があった。教員は両者の話を十分に聞いた上で、どちらの方法も到達点は同じで、立場の違いによる表現の違いという整理をし、疑問点は別の記録として残し、実習後のまとめの中で考えてみようということにした。実習1週目までは実習指導者から、言葉がはっきりしていない、挨拶ができていない、反応が弱い、発言が少ない、消極的、疑問点など直接質問しないで「記録に書きました」という処理のしかたをしているなどの指摘が続いた。しかし2週目に入ると、「職員の後について歩く姿がやっと見え始め慣れてきた様子が窺える。職員の後につくことによって介護の量・質・内容を知ることができたのではないか。」というような受容的な報告に変わっていった。実習終盤近くになってお互いの理解ができてきたようであった。

【事例3】話かけても反応がにぶく応答的ではないので実習の進捗状況が把握しにくい学生に対して、「実習初日の緊張した状況を0とすると、4日目の今日は何点ぐらいか？」と点数で答えてもらう方法を行ってみた。二人ともマイナスにはなっていないでプラスの4点と答えた。「その4点はどのような変化による点数なのか？」と聞いてみると、一人は、「始めはとにかく緊張していて何もわからなく何も見えなかったが、仕事のペースがわかってきたので安心していられるようになった。利用者のことまでわかってきたので落ち着いて介護ができるようになってきたから。」との返答であった。もう一人は、「仕事の流れがわかってきた。職員に自分から聞けるようになってきた。2回目の実習場なので前回より積極的に動かなければと思い続けながら実習ができていたから。」という答えが返ってきた。時間の経過による慣れはどのような場面においても落ち着きをもたらし、成長の手助けになると思われる。

【事例4】実習6日目における実習目標の達成度は0点であると言う。理由は、今回は「認知症のある利用者の叶えてあげられない要求（家に帰りたいなど）にどのように対処したらよいのかを学ぶ。」という実習目標であったが、そのような要求に出会っていないからということであった。実習全体の自己評価は2点。おむつ交換や食事介助は一人でできるようになったが一つひとつの介護を行うときの声かけが足りないと指摘されたからだそうである。学生自身の分析では、技術の方に気持ちのすべてが向いてしまいゆとりがないため、技術に自信が持てるようになれば声かけがスムーズにできるようになると思うとのことであった。そのためにはたくさんの経験が必要であると言っていた。

【事例5】実習初日の状態が0点とすると6日目のきょうは7点であると採点した学生は実習がとても楽しいと言う。「コミュニケーションから入り、いろいろな利用者と接することができた。積極的に動こうと思っていたことができている。見ているだけということがなくなった。質問も積極的にしている。」とプラスに評価している。「どうやってそのようにできるようになったのか？」との問いに、「実習指導者が毎朝『今日の実習の目標は？』と聞いてくれてそれを一日中頭に入れて実習をしているからで、毎日の目標は朝家から実習場まで歩く50分の間に考えている。家を出るときは頭がボーっとしているが実習場に近づくにつれて心身ともに実習モードへと切り替わっていくのがわかる。自分で考えて決めてやらなければという心構えができる。」ということであった。

【事例6】実習の自己評価は5点。「前の実習よりは多くのことを経験させてもらっている。自分が経験したいことを職員に伝えることができているが、それは職員が誘いかけてくれて自分の実習に対する希望を伝えてもよいと思えるからだ。」という。さらに「技術のレベルアップには回数を重ねることが大切で、わからないことは積極的に質問するようにしている。すると職員は問いに関する答えだけでなく、自分が考えもしなかったことまで説明をしてくれとても幅広いところまで学ぶことができた。」等々学生から報告があった。学生が自分から積極的に質問できるかどうかは施設の雰囲気大きく左右されるようであった。

3.2.2. 実習巡回指導方法の課題

これらの事例を読むと、実習生は、実習生個人要因、実習施設の要因、実習段階などの様々な要因からおこる不安や期待感などの葛藤のなかで実習を行っていることが理解できる。このような不安を抱えた学生の実習を支えるために教員の巡回指導が行われる。この巡回指導をどのように行うかは理論的な体系がまだ確立されておらず、教員個人のスタイルにまかされているのが現状である。

巡回指導の一般的な方法は、実習指導者との面談、学生との面談、学生と実習施設との調整などである。これらの巡回指導により学生の実習目標を達成させ、介護福祉士として成長を促すことが求められている。

つぎに前記の事例をもとに教員の巡回指導における課題について考察する。

事例1は、実習直前になり実習場が変更になり、不本意なまま新たな実習先に配属されたことから実習に意欲が出ない学生への指導場面である。学生の気持ちを丁寧に傾聴することから学生が心を開き、指導が進展していった事例である。

事例2は、実習中におこる学生の疑問やゆらぎに対して、施設の実習指導者から悪い評価をされてしまう場合での、指導者と学生の気持ちの両方のすれ違いをどのように調整していくかという課題である。

事例3は、実習のストレスの中、自分が今どのような実習を行っているのかさえつかめず、表現できない学生に対して、指導する教員がなんとかその状態をつかもうと工夫した事例である。

事例4は、事前に考えてきた実習の目標が実際の実習先の状況と合わないため、とまどいながら実習を行っている学生に対して、自己分析をすることから解決を図ろうと指導した事例である。

事例5と事例6は、実習のストレスを学生自らが解決しつつ、少しずつ変化をおこし、実習が楽しいというところまでになった事例である。

どの事例においても、巡回教員は実習する学生の気持ちの揺れや実習達成感や不全感を把握し、短時間の個人面談やグループ面談のなかで、学生がみずから解決する、もしくは施設指導者との調整などを通してその状態を解決し、介護福祉士を目指す学生としての成長をリードすることが求められているといえる。

3.2.3. 巡回指導における面接技法活用の試み

実習巡回指導における教員に求められる課題に対して、その面接指導に活用できる技法として現在試みているものは、短期療法（ブリーフセラピー）の1つであるソリューション・フォーカスト・アプローチである。

ソリューション・フォーカスト・アプローチ（Solution Focused Approach 以下S・F・Aと略す）を直訳すると「解決に焦点づけられた取り組み方」である。S・F・Aが医療モデルを背景とする伝統的カウンセリングの技法は異なるところは、問題の原因ではなく、問題の解決に焦点が当てられる点である。この技法はアメリカで1950年代に始まった家族療法をルーツに持ち、1970年代にスティーブ・ディ・シェイザー（Steve de Shazer）とインスー・キム・バーグ（Insoo Kim Berg）を中心に開発されてきた面接技法である。二人はアメリカミルウォーキーのブリーフ・ファミリー・セラピー・センター（Brief Family Therapy Center）で、解決に有効であった要素を帰納的に抽出し、有効な面接とは何かを模索する中で、「問題志向ではなく解決志向」というパラダイムに到達したという。

この考え方を実習中に学生の状況にあてはめてみよう。学生が自分でうまくできない、理解できないなどの介護を学ぶ上でのさまざまな困惑や揺らぎを主体的に解決しながら、実習で学びたいと考えてきた達成目標を志向していくことを支援する方法といえよう。

1) 活用の実際

1年次 1段階後期実習と2段階前期実習で荒木が巡回担当をおこなった学生に対して、巡回指導の面接に以下の面接技法を活用してみた。

例外を探す質問

学生は実習の中で、うまくできない技術のことや、うまく聞き取れないことなどに意識を向け、まったくできないと気を落としてしまっていることがある。このようなときは、最近の実習の中で、たとえば今日の実習の中で、ちょっとはましなことはおきなかったかを聞く事である。学生がその例外に答えることができたならば、その例外について、誰の介護で、いつ、どんなときにと探っていくのである。学生の意図によって起きた例外もあれば、偶然の例外もある。このうまくいった例外を面接の終わりに与えるフィードバックに生かすことができる。

スケーリング・クエッション

隔日に巡回をくりかえしていくと、学生にとっては一昨日と今日はどのように変わったのかを整理できないままの状態であることが多い。スケーリング・クエッションは、経験したことが漠然とし整理されないままの学生の实習経験を数値で表現させる面接技法である。例外探しの質問で答えることができない学生も、スケーリング・クエッションではなんらかの変化があるという直感的な実感を数値に表して表現することができる。この技法のもつ遊び的な気軽さも自由な表現を助けているようだ。

教員：スケーリング・クエッションというちょっと変わった質問をさせてね。0から10までの目盛りを使って今のあなたの実習の状態を表現してみしてほしいんだ。実習初日の緊張してパニック状態のときを0として、10は、あなたがイメージしてきた実習生としての自分の最高状態とするね。今日はどれくらいの状態かな？

学生：うーん、そうですね。実習初日はほんとうに緊張していたしね。あの状態にくらべたら今日は3くらいかな。

教員：そう、3だって？それはすごいよね。だってまだ実習3日目だよ。まだ業務の流れもつかめないし、職員や利用者の名前もおぼえていないでしょう？0が3になったってことは何が変わったのかな？

学生：うーん、なんだろうね。よくわかんないけど、初日とは違う感じがするのね。

そうだ今日はね。実習指導の担当の職員さんが、とてもあったかい感じの人でね。最初に丁寧に今日は何を勉強してみたいと聞いてもらえたので、そのときに楽な気持ちになって、移乗介助を学びたいと言えたことがよかったと思うわ。

教員：他には？

学生：そうだ。3日間の実習ですっと食事介助がうまくできなかったWさんが、さっきの昼食のときにね、聞き取りにくい発音だったんだけど「ありがとね」と私に言ってくれて、それがとてもうれしかったわ。なんかそれで実習をもっともっと頑張ろうという気持ちになったのね。

教員：すごいよい経験しているね。

このようにスケーリングクエッションは、学生が自分で自分を評価する方法となる。またほんの小さな喜びや感動をしっかりと自分に定着させ、それを積み重ねながら自信をつけていくことをリードする方法を含むものである。

また実習中盤になると、学生はこのスケーリング・クエッションでの評価が下がる場合がある。初期のころの伸びに比べ、期待するほど技術も応答などもうまくなっていない焦りがある場合である。

教員：もう実習も中盤にかかっているね。前回のスケーリング・クエッションでは5だったよね。今日はどんな調子ですか？0から10の間でいうとどんな数値となるの？

学生：そっかあ。前は5だったっけ？そうですね。今日は3くらいかなあ。

教員：なんだか疲れているみたいだね。前回とどこが変わったのかな？

学生：疲れているのかもしれないです。なんだか毎日同じことの繰り返しになってしまって、最初のころのようにすごくうまくできるようになっていくという感激がうすれているように思うのね。どんどんうまくなっていくことができなくて。

教員：そうだったのか。あまり期待が強すぎると、それにそぐわないと満足しないものね。成長するのはね、知らないうちにぼんとジャンプするように変化するようだよ。成長することとかうまくなることを目的にしないで、その場その場をしっかりと丁寧に実習することが大切だよ。

学生：はい。ちょっと焦っていたのかな。さんと比較していたところがありました。自分のペースでいきます。

同じようにスケーリング・クエッションの尺度が下がる場合があるが、この場合は職員の介護の仕

方などを学び、自分が目標としたレベルがあまりにも低かったことに気づいたときである。

教員：調子はいいようだね。すごく明るい顔をしているね。前回のスケーリング・クエッションは6だったよね。今日はどんな具合。

学生：はい、前は6と言ったんですけど、今日は3くらいだと思います。

教員：へえ、すごく元気もあるし実習がうまくいっているように思うんだけど。さっき実習指導者の方と話してきたときも、大変意欲的でよく学習しているってほめられていたんだけどねえ。

学生：ありがとうございます。そうなんです。学べば学ぶほど、私が最初に考えてきた目標レベルがとても低いことが分かりました。ほんとうに職員の方はすごいんです。一ケタも二ケタも違います。だから3くらいなんです。

教員：そうか、10の尺度が変化したんだね。目標レベルがどんとあがったわけだ。なるほど。そりゃすごいね。

ウェルフォームド・ゴールづくりとコンプリメント（賞賛）

小さな自信を積み重ねながら成長していく学生は実習終盤となると、スケーリング・クエッションも7から8くらいまでの尺度を自分の状態ととらえていた。実習終了2日ほどに前の巡回指導では、このスケーリング・クエッションの後に、ウェルフォームド・ゴールを意識するような面接をおこなってみた。

教員：残りあと2日だね。いままでよくやって来たね。前回の面談では個人目標としてきたこともしっかりと達成できたようだね。じゃあね。スケーリング・クエッションの変形の質問していいかな。今日の尺度は7って言っていたよね。じゃあね。あなたが10というレベルになっていると、具体的にいうとどんな介護をしているんだろう。

学生：はい。10のレベルですよね。今回の私の目標は、介護をしながらちゃんと説明や話ができることを目標にしてきました。一応それは前の実習よりはできるようになっていると思います。けどまだ対面して介護をするその相手の方だけしか意識されていないように思うんです。ですから10のレベルとなると、介護をしているときも、たとえば廊下をあるいているときも、いつも利用者のみなさんを意識し気配りしていると思います。そうするといろいろな利用者から、いつも声をかけられ、私もだれにも声や笑顔を返していると思います。そんな状態になるだろうと思います。

教員：そういう介護者、とても良いなあ。1年生の1段階実習でね、このレベルに気づく学生はいままで初めてだよ。あと2日間をね、今言ったことなんかもう少し意識しながら、最後のまとめをやってみてね。

2) 活用ができない場合

学生の一步後ろからリードする、このような巡回指導はとても楽しいものであった。しかし学生状況によっては、順調に指導がすまないことも多く起こっている。たとえば巡回して顔をあわせた途端、学生が泣き出し訴えるようなときである。まずはしっかりと気持ちを表現させ、傾聴と共感に徹することしかできない。

また実習指導者からの学生の行動などに対して注意をされたときなども、指導者のことばを一つひ

とつ具体的に聞きながら、学生とそれととりまく施設での実習環境の中で何が起きているのかを分析し、すぐに解決すべき課題と判断できるならば、その場で解決していくという巡回指導になる。

4. おわりに

介護福祉教育において、介護実習を中心にした科目間での連携の取り組みが検討されはじめている。とりわけ介護保険制度導入に伴い、他職種との連携を意識した医学系科目、家政学系科目との連携は研究が進んでいる。しかし介護福祉系科目である介護技術演習^{iv}、形態別介護技術演習などの演習科目と介護概論等の理論系科目と介護実習との3領域間の教育の連携については今後の研究が急務といえる。本報告では、学生の特性を鑑み、他者とのタッチングなどの身体的な関係トレーニングや、チームでの動きを意識させた演習を試み、介護実習の中でその効果を検証した取り組みを報告した。また実習巡回指導において学生の個別的な状況にあわせた面接を行うために、ソリューション・フォーカスト・アプローチの面接技法を試行した結果について報告した。この面接技法の活用により、学生の状態をつかむことが容易になったことは確かである。しかし学生の状態や性格などの要因で、すべての学生に同じように適用できるということではないということもわかった。しかしこれらの両側面を見比べても、短時間で学生の状態をつかみ、学生をエンパワーするような適切な指導ができる可能性を強く感じているところである。今後さらにこの技法の理解とトレーニングを積み重ね、効果的な学生指導方法の体系化をすすめたい。

また来年度以降、2年次に行われるカリキュラム(3段階実習、居宅介護実習、特別研究、形態別介護技術IIなど)の科目を通じて、学生の成長をどのようにリードし、またその教育についてどのように評価するかという点においてもさらに研究をすすめる必要がある。

引用文献

- i 澤田信子・小櫃芳江・峯尾武巳編、「介護実習指導方法」、全社協、2003、71p
- ii 澤田信子・小櫃芳江・峯尾武巳編、「介護実習指導方法」、全社協、2003、107p
- iii Peter De Jong & Insoo Kim Berg, 玉真慎子他訳、「解決のための面接技法<第2版>」、金剛出版、2004、22p
- iv 荒木重嗣、「医学一般と介護系科目との関連ある教育に向けて」介護福祉教育、第11巻第1号、2005、30p-34p

